

デズク日誌

「『改憲』のくわだてを阻むため、一人一人ができる、あらゆる努力を、いますぐ始めることを訴えます」。2004年6月、大江健三郎さんらはこの呼び掛け、九条の会を立ち上げた▼あれから11年。同会

今こそ立ち止まりたい

ピールで指摘した懸念は、論封じ」のとびとびしい言次々に現実化した。教育基説も飛び交う。世の中を単本法改定、武器輸出三原則色に染め上げようとするこの変更、集団的自衛権の行とは許されない▼「切れ目使容認」▼憲法学者に続なき対応」を標榜する同法き、法制局長官経験者も、案成立を強行すれば、社会集団的自衛権行使を可能とに大きな「切れ目」ができ、する安保関連法案に疑義を平和主義の歴史に深い「裂表明。同法案への包囲網は「け目」が生じる。立ち止ま分厚さを増す。一方で「言りたい。(報道部・川崎勉)

(2015・6・28)

いばらき春秋

2015・6・28

梅雨の晴れ間に、日立郷土博物館のギャラリー写真展をのぞいた。日立空襲と戦時下の生活を記録した写真が30点ほど展示されている。日立製作所の工場や市民などから提供された貴重な資料である▼70年前の6月から7月にかけて、日立市は米軍から3度攻撃を受け、工場群と市街地は壊滅。1500人を超す工場従業員と市民が死亡した▼写真は1、爆弾で破壊された工場や、焼夷弾攻撃で炎上する市街地の惨状を伝える。火の雨の中を逃げ惑い、命を奪われた方々の無念を思うと、あらためて非戦と平和の願いを強くする▼戦前生まれと思われる男性が家族に付き添われ、写真に見入っていた。戦後世代が総人口の8割を超え、戦争を直接知る人は年々減っている。この夏は戦争の記憶を風化させず、未来へつなぐ重要な機会となる▼「みるく世がやゆら」。今は平和でしょうか。沖縄慰霊の日、男子高校生が島言葉を交えて平和の詩を朗読した。繰り返された問い掛けが頭から離れない。答えは私たち一人一人の心の中にある▼戦争を具体的に思い描けない子どもたちでも、体験者の話や史料から、何かを感じ取ることができる。道案内は大人の務めである。(菊)